

ことば



赤峰峰子

ことばとは、本当に大切にしなければいけないと、五十をすぎてやつと気がついたこのごろの私である。顔でニコニコしながら相手をつきさすようなことばをほく人がいる。かと思ふと、まるで年上の人のように、私をさとすことばをさらりといつてのける後輩がいる。そのたびに、果して私のことばはここまで心を使って口に出しているだろうか、と心配になる。

私は非常に感情的な人間である。だから“熱しやすくさめやすい”的、ことにあとの方を自分でも気をつけている。“熱しやすい”ということはそんなに悪いこととは思っていないのは、少々虫がよすぎるだらうか……。でもこれが時として思いつきのことばになつたり行動になつたりすること多う。私のある友人はこれを評して“あなたは衝動的な人”といって暗に私を戒めてくれた。私は本当にそうだと思いむしろうれしかった。これから人生はもうことばに責任をもち、ことばに出したら時間のできる人間になりたい。それでいて相手を傷つけた

はいくらかかってもそれを実行する人間になりたいと思う。でも私にとつてこれは一番むずかしいことらしいと、日ごろの自分をかえりみてしみじみ思つてゐる。

ことばを口に出す時、大抵の場合それをうけとめてくれる相手がいる。そしてその相手によって“最初はこんなことばが出てくるはずではなかつたのに”などというような、自分が思ひもよらない、“しまつた！”などと思うようなことがちがとび出してしまう。これも私がそそかしく考え方方が浅いからだと思う。

また、何となく素直に素直なことばで話したくなるような時と、あたらすわらずといった適当なことばで話を終つてしまふ時がある。それだけならまだしも、いわゆる“ひと言多い”いやなことばを口に出すことさえある。同じ一人の人間でありながら、どうしてこんなに心おだやかでいられないのだろう。いつでも素直に自分の心をことばでいいあらわすことのできる人間になりたい。それでいて相手を傷つけた

り、悲しませたりしないでいられたら……。そうなるのには私の中の心から、そういうふうに努めなければならないのだろう。そしていつの日か、努めなくても美しく、心やさしく、気がきいて、ユーモアもあることばが出せるような、そんなおばあさんになりたいと思っている。

もう三年も前の秋、新幹線の中で偶然お知り合いになった櫛田ふき先生はこういうおばあまだと思う。京都の鼓常良先生をお訪ねするのに、私は例の加く不勉強でドロナワ式に列車の中で少し勉強を、と『幼児の秘密』をひろげた。二人がけの席の窓ぎわにはクリーム色の仕立てのよいスースを召した白髪の女の方がすわっていらした。しばらくするとその方は、「あなた、奥さま……だけじゃないでしょ?」と話しかけていらした。私はびっくりして、それでも、『幼児の教育』の編集のお手伝いをしていることをお話をした。その方は、「やっぱりね。読んでいらっしゃるご本もむずかしそうだし……、でもいいことですよ。女人はどんどん外へ出なけりや」と私が赤面するようなことを物静かに話された。「私も主人も娘も孫もいるんですよ。でも出かけることが多くて、今日は姫路、この間はキューバに行つてきたんですよ」

「あなたご主人は? (私が、なかなか心から仕事をすることに賛成してもらえないと申し上げると) ある程度、こういうものだと思わせててしまうことですよ。両方を完全にと思うと無理がかかりますからね」

いただいた名刺には、"日本婦人団体連合会会長"といふ、めしい肩書きがついていたけれど、とてもそんな感じではない上品な、一目ぼれするようなおばあまだった。私はちょうど持っていた服部たか子さんの詩集『白い木馬』を「お読みになりませんか」とお渡しした。京都に近くになつて櫛田先生は「いい詩集ですね。よかつたらゆずついていただけないかしら」といわれた。私は一人でも多くの方に読んでいただきたいと思っていたし、ほんの三時間たらずでも私にとってとも心あたたまる出会いの記念に、喜んでそれをさし上げた。そして京都での仕事が終つて活字になつた時はお目にかけましようとお約束して、私の方が一足先に列車を降りた。

その後私はお約束通り、鼓先生と周郷先生の対談の掲載された雑誌をお送りしたり年賀状やら暑中見舞いやら、先生のおやさしいお顔やお声を思い出してはお便りをしていた。そして先生も達筆でお便りを下さつて、昨年はご病気をなさつて入院なさつたとか……でもお元気になられてからのお便り

が届いて、私も安心した。たった一度お目にかかるだけなのに、この方には私は何でも素直にお話ができるような気がする。そしてあの新幹線の中でも、あまりことばを妙にこねくり回したりしないでお話ができたと思う。

今年の年賀状に、私は昨年十一月末のすばらしかったアメリカ行きのことと、雑誌の仕事をやめさせていたい動物園に行っていることを書きそえておいた。すると二月のある日、櫛田先生からすばらしいお便りが届いた。“お茶の会”案内”とあって、日時、ところ、そのあとに次のよう書いてあつた。

“久しくおめにかからない方、すれちがいばかりでお話もろくにできずにいた方がたをお招きしました。プライベートなささやかな集まり、何の風情もありませんが忘れそうになれるお顔を拝見させてくださいませんか、おまちしています”

何と魅力的なお招きだろう、と私はすっかりうれしくなつた。でも残念なことにその日はちょうど動物園の日、雨降りだったらお休みをいただいて……などと思いあぐねた末、櫛田先生のお宅へお電話した。直接先生が出ていらして、あ、あのなつかしいお声、あちらでも。

「あー、あなたね。いつもお便りありがとうございます。アメリカは

よかつたでしょう？」とうてばひびくようなおことばだった。私が、とても残念だけど当日は雨が降らないかぎりうかがえないと申し上げると、

「六時近くまで（ご案内には五時までと書いてある）そこにいますから、お仕事がもし早く終つたらいらしてちょうだいな。実はね、私、あなたのこととてもよく覚えてるの。でもお顔を忘れちゃったの。あなたもそうじやない？ 多分外でお会いしてもわからないと思うの。だからお目にかかりたいと思って……、実はこの日は私の誕生日（お年をおっしゃつたはずなのに、どうしても思い出せない）なの」

私は、もし雨降りか、仕事が早くすんだら……と申し上げて残念ながら電話を切つた。もちろんアメリカ旅行の、中でも印象の深かつたアマーストでの三日間（周郷先生が七、八月号に書かれたような）のこともお話をした。先生は、

「あなたは幸せな方ね。アメリカのいいところを見ていらしたのね。あなたのお話を聞いてると、あなたがどんなすばらしい旅をしていらしたか、わかるわ」とおっしゃつた。
「それから、いつかの『白い木馬』ね。すばらしいご本で

すよね。私の方で出している婦人通信という小さい雑誌に紹介させていただいたの。周郷先生の方へそのこと申し上げて

雑誌もお送りしておきましたから、おついでに先生によろしくね」と思いがけずうれしいお話をだつた。

私は、"動物園をサボろうかな"と思つたりもしたが思い直して、先生のお誕生日の前日、そのお茶の会をなさる代々木のダルニー果園といふところへ行つた。その日は雨で、ちよつと探してそのお店は見つかった。「果物がおいしいのよ」と先生がおっしゃつたように、フルーツパーカーといった感じのお店で、入ると苺、柑橘類、バナナと、色とりどりの果物がまるで飾りつけられたようにおいてあつた。私は、明日櫛田先生からお招きをいただいたのだが、と年配の主人らしい男の人に私の気持ちだけのお祝いをことづけた。その人は「もしいらつしやれたらいらして下さいよ。櫛田先生、楽しみにしていらっしゃるんですよ」とこく自然にいってくれた。私は私の好きな『だつてだつてのおばあさん』の絵本をプレゼントした。

当日はやはり晴れて、私はとうとうその会にうかがえなかつた。そして数日たつて先生からお電話をいただいた。

「かわいい」本をありがとう。本当にかわいいのね。今度はきっとお目にかかりましょうね」と。

私もその日を楽しみにしている。

毎日毎日のくらしの中には、こんなすばらしいことばかりが交されることは限らない。バスの中で、反対方向のバスに乗つてしまつたお客様が、「どうしたらいいかしら」というのに、「それはお客様が悪いんですからね、わかりませんよ。早く降りてください」と冷たくいい放つ運転手を見たこともある。同じようにバスの中で、ゾロッとした長いスカートをしてペーマをかけた三、四人の女子高校生が、お腹の大きい女の人のことを指さして下品なことばをきこえよがしにいのをきいたこともある。この人たちの場合はことば、それこそ外山先生のおっしゃる母乳語、離乳語が乱れていたのだろうか。私も時々娘たちのことばにギョッとしたがら後悔することが多い。

でも、動物園で私の手をソッとひっぱつて話しかけてくる二、三歳児のことばは、実にすばらしいと思い、その時の私は本当に幸せだなと大げさでなく思う。このごろ少々暑くなつてバテ気味のウサギは、砂の上でだらしなくのびている。何かの拍子にそのウサギが普通にすわったのを見て、

「おばちゃん、ウサギが起きたよ」と、そつと知らせにきてくれた子がいた。こんなことばを書きとめておきたい、ここれも思うだけの私である。